

2019（令和1）年度 京都大学 入試問題 理系 第1問 解答例

問一

近代科学が実定的科学性へと進んだのは、観念から経験への移行によるという常識的な理解とは逆に、日常的な経験を混乱の集積と見る、伝統的経験への不信感によるから。

- * 「事態」（主題）が、「（常識と較べて）遥かに複雑」である（帰結判断）とされる理由（判断根拠となる前提）の説明である。まず**主題の「事態」を明確化して記述**する。「事態」とは事物の生成・進展・状態等を指し、「認識・知見」等ではない。ここでは「近代科学が～一步を踏み出す」こと、すなわち実定的な近代科学へと「進歩したこと」である。
- * 「（常識より）遥かに複雑」という比較判断の理由であるから、解答構成・内容は、この「事態」について、「観念から経験へ」という常識的なものによるのではなく、むしろ「逆」に、「伝統的経験への不信感」（という逆説的原因）によるものであった（から）、となる。
- * **最後の解答要素は**、なぜ「観念から経験」ではなく、「経験へのこの上ない不信感」が生じるのか、である。それは「**日常的な経験は「混乱の集積」に過ぎないから**、である。
- * 傍線部（1）は、「彼＝アガンベンにいわせれば」であるから、アガンベンの論も傍線部（2）も超えた、「経験科学」の「特殊な経験構成を前提とする」は解答要素に入れない。

問二

近代科学の実験は、混乱の集積にすぎない日常的な経験とは異なり、一定の目的意識で条件を純化し、感覚受容を装置で代替して緻密さを保証し、原基的構想の妥当性を装置と数量で試す、極めて構築的、人工的で特殊な経験であるから。

- * 解答内容自体は、傍線部直後の「〈実験〉」の説明にすべて含まれているので、発見は容易である。「一定の目的意識により～極めて構築的な経験、極めて人工的な経験なのだ」を、「〈経験〉」との対照も含めて、簡潔にまとめればよい。したがって、この設問の眼目として問われているのは、「内容理解」ではなく、むしろ、それをまとめる際の表現力である。解答欄に入りきらないからといって（小さな字で書くのは論外としても）、**並列要素を安易に一部カットしてしまったり、比喩のまま用いてしまったりしないことがポイント**なのである。〈 〉が付されている語の適切な置換にも配慮すること。
- * 当然ながら、「〈実験〉が〈経験〉の延長とは異なる」理由の説明であるから、解答の構文は「**実験は～であり、～な経験とは異なるから**」という「**実験／経験の対照でなければ不可**」である。「実験は～漫然とした観察とは異なるから」などとしなないように。

問三

日常世界での経験に近代科学的な検討を加えた寺田寅彦の物理学の仕事には、近代科学が使い物にならないものとして排した日常的世界での経験に寺田が代替的な意義を見て、捨てがたく思っているような印象があるという意味。

*表現力テストの面が強い設問。表現力は従来も問われているが、近年の京大現代文はその傾向が強くなっている。①「〈経験からの退却〉」、②「惜しむ」、③「～かのような風情」の3点は、適切な一般的表現を用いて確実に置換しきること。

*主題「それは」の指示内容（寺田物理学、寺田の仕事の内容）も解答要素である。

問四

トレサン伯爵の電流論は、日常的水準での直観を基盤としたまま連続的な推論がなされているので、物理学的言説であろうとしながら、実定性を欠き、途中で頓挫しているから。

*主題「それ」＝「トレサン伯爵の論じたありさま」は、なぜ「〈経験からの退却〉のし損ない」と言われるのか。問二と同様の論拠説明であるから、主題についての前提的内容説明を本文に求めればよい。傍線部直前によれば、「それ」は「物理的言説であろうとしながら～日常的水準での直観からそのまま連続的な推論がなされている」からである。また、傍線部直後の「それに対して、寺田の場合には、～であり、途中で頓挫した前進運動なのではない」により、主題トレサン伯爵の論の場合は、「途中で頓挫」しているから、「～し損ない」なのである。